

2020TOKYO ボート競技会場に関する日本ボート協会の見解

1、海の森水上競技場に決定した理由

国内にはオリンピックを開催できる施設が存在せず、新たに整備しなおす必要があります。今回、名前の挙がった宮城県の長沼ボートコースや、埼玉県の彩湖なども含め検討をいたしました。長沼はロケーションが遠く、さらに選手役員観客などの宿泊施設も近くには足りない状況です。また、長沼コースの仮設設備は一回のオリンピック・パラリンピックで廃棄されてしまうことになり、たとえ設備を恒久としてもその後の使用頻度を考えると現実的には廃棄に近いものになってしまいます。

彩湖は直線で2000mのコースと回送路を確保できないため、調整池を掘削し拡張する必要があります。絶滅危惧種の生物も存在し工事を行うには慎重な対策が必要です。また、洪水に備えた調整池のため、ひとたび大雨が降るなどして荒川が氾濫する危険が生じたときに、彩湖に水を引き入れて東京都など下流を守る必要があります。そのため、彩湖には恒久施設を造ることが認められていません。平成11年8月には荒川が増水し流れ込んだ濁流で彩湖自体が水没してしまった事実を鑑みても、そのような機能のための調整池にはリスク上からも恒久的なボートコースを造るのは困難なのです。

日本ボート協会としては、東京五輪を機に、レガシーとして50年、100年と使用できる国際大会を開催できるボートコースを整備してほしいと要望してきました。しかしながら、海の森以外の詳細に検討した8つのコースはすべて仮設とせざるを得ません。たとえレースを行える水面のみ残ったとしても、艇を置く場所などがなければ練習などで恒常的に使用することができません。また、一回の大会のために数十億円から数百億円の仮設コストをかけるのは本意ではありません。唯一、恒久施設として整備できるコースとして海の森水上競技場が残りました。

2、レガシーとしての海の森水上競技場の意義

選手登録人数は9000人、登録していないボート人口を入れても2万人程度に500億円もの施設は高すぎるとの批判があることは承知しています。

ボートは世界的に見ても高校生、大学生から初めても十分に五輪でメダルを狙える競技です。しかしながら、ボートを始めるには非常に大きなハードルが存在します。近くにボートコースがなければ、競技を始めることができないということです。

都心の真ん中にボートコースができることは、日本最大人口の東京都にボートを始めるチャンスができることとなります。

海の森公園はFISAからもレガシー施設として大きな期待が寄せられています。これまで日本に国際レースができる常設コースがなかったために、国際レースの招致ができま

せんでした。国際空港や都心からも近く、観客の集客も容易な場所に国際レースができる施設は世界的に見ても貴重で、F I S Aもロケーションについて高く評価しております。恒久施設であれば、今後も世界選手権などトップレベルの大会を招致可能となります。

また都民にとっても利用可能な施設となります。海の森水上競技場と一体となって整備される海の森公園とともに、ドラゴンボート、トライアスロン、スタンドアップパドルボートを行う水上公園として利用可能となります。

最後に、現在東京都にはボートコースがありません。東京都の中高生にとって、海の森水上競技場はホームコースとして利用されます。

3、アスリートファーストではないという見解について

選手のなかにも様々な意見が存在することは承知しております。

- ① 現在、多くの艇庫が集まる戸田から離れている②海なので海風が吹く、うねりが入るのではないかと③海なので用具の耐用年数が短くなる④海での国際大会はほとんどないなどが、反対の理由かと思えます。

前提として、オリンピックを行うコースの設計は、すべて国際ボート連盟（FISA）の指示・監督のもと行っており、F I S Aは最適と評価しております。したがって、風、波、海水ともにすべて開催可能との判断を下しており、問題ないと考えています。

- ① 現在の戸田から離れているという点に関して

戸田に艇庫を持たない全国のボート団体にとっては、恒久施設のある海の森水上競技場は意義のあるものになると考えております。また、戸田にボートコースの混雑状況は異常で、衝突の危険性があり一刻も早く他のボートコースを造る必要があります。

- ② 海風が吹く、うねりが入るとの指摘に関して

風については風解析の権威による十分なシミュレーションを行い、防風壁、防風林施設によって公平性が保たれることはF I S Aも確認済みです。また、波やうねりについてはコースは、海とは締切堤で分断されており静水となります。外海からの進入波やうねりの影響は全くありません。

- ③ 海なので用具の耐用年数が短くなるに関して

国内においても海水のコースは存在し、それらのコースで耐用年数が短いとのデータは把握しておりません。とはいえ、そのような指摘に対応し、真水で洗い流すための施設を十分に用意いたします。

- ④ 海での国際大会はほとんどないという指摘に関して

リオ五輪やアテネ五輪の会場となった水域は汽水（低塩分の海水）でした。海水のコースは世界でも存在します。イタリアのジェノバ、シンガポールなどがあり大会が開催されています。また、当初の計画の段階でFISAに照会し、F I S Aより海水で問題ないと回答をもらっています。

またリオ五輪に出場した選手を含む、日本ボート協会のアスリート委員会は恒久的な施設を望む、また分村は避けてほしいとの要望を 10 月 17 日に表明し、海の森水上競技場を支持しました。

4、建設費用が高いという批判に対する見解

ローランド会長ならびに FISA は海の森水上競技場を現在も支持し、費用削減に向け努力すると声明を出しています。日本ボート協会としても、FISA と協力しさらなる費用削減に向け東京都とも話し合いを続けてまいります。

以下が 10 月 11 日に FISA が発表した見解です。

FISA HP 「News Article」 記事翻訳

2016 年 10 月 11 日掲載

<http://www.worldrowing.com/news/fisa-statement-regarding-games-planning-tokyo>

東京におけるオリンピック競技計画に関する FISA よりの声明

FISA 会長のジャン・クリストフ・ローランドは、先週、東京都知事の小池百合子を訪問し、オリンピックを成功へ導くため、東京都が引き続き行っていく役割と責任について話し合いました。小池都知事からは、自身が設置した改革パネル（都政改革本部調査チーム）が、大会計画のいくつかの要素の再調査を行い、ボート及びカヌー・スプリントの競技場を、現行の海の森水上競技場から 400km 北の長沼（宮城県）への変更の検討を推奨したレポートが提出された、との発言が改めてありました。

ローランド氏は、コストを抑えつつ、東京の人々がレガシーを最大限に享受できるよう、FISA が誠実に取り組んでいくことを約束しました。同時に、2014 年に徹底的に且つ詳細に日本の 47 のボート場について分析が行われていることから、改革パネルの調査結果についての懸念を示しました。この分析の結果として、9 か所の候補地を選び、さらなる調査を FISA、東京都、2020 東京組織委員会が行った結果、日本において、オリンピックのボート競技を行う必要な条件が備わった唯一の会場として、海の森水上競技場が選ばれました。

海の森水上競技場は、東京都民にとっては、大いなるレガシーとなることが予想されます。長沼の案はコストが今以上にかかり、その遠隔な地理条件からレガシーとしての活用には

疑問が残ります。海の森水上競技場計画は、水上スポーツのトレーニング及びレクリエーションの場所として利用できるようデザインされており、東京都民、特に東京湾エリアの新しいコミュニティーの人々を水と東京湾に結びつけることでしょう。

海の森水上競技場はカヌー及びボートの IF、IOC、2020 東京組織委員会、東京都により承認されています。詳細なデザイン計画は、両方の競技により承認されています。 今回の訪問にて、FISA 会長は自身で建設が始まった現場を視察しました。

FISA は引き続き、海の森のコスト削減と効率的な活用を全力で模索して参りますし、同時に、東京 2020 において世界トップクラスの競技会場となるよう努めます。さらに、この会場が東京の人々にとって持続可能な素晴らしいレガシーとなることを期待しています。

(以下、英語原文)

FISA Statement regarding Games planning in Tokyo

FISA President Jean-Christophe Rolland met last week with Yuriko Koike, the Tokyo Metropolitan Governor and discussed Tokyo's continuing commitment to stage an outstanding Olympic Games. Governor Koike confirmed that the reform panel she had formed to review certain elements of Games planning had made a report which recommended to consider moving the rowing and canoe sprint competitions from the planned Sea Forest Waterway water sports Centre to Naganuma Lake (Miyagi Prefecture) 400km North of Tokyo.

Mr. Rolland confirmed FISA's sincere commitment to limiting costs and maximizing legacy for the people of Tokyo. He equally expressed his concern about the review panel conclusion because in 2014 an in-depth and thorough analysis of 47 rowing sites in Japan was conducted in Japan. At the conclusion of this analysis nine potential venues were reviewed in full detail by FISA, TMG and Tokyo 2020, which resulted in the selection of the Sea Forest Water Sports Centre as the only venue in Japan which can meet the requirements for an Olympic Games regatta.

The Sea Forest Water Sports Centre will also provide a strong legacy for the citizens of Tokyo. The Naganuma option was both more expensive and the legacy impact was questionable due to its remote location. The Sea Forest Water Sports Centre project is being designed to serve as a water sports training and recreation area, which will connect

the citizens of Tokyo and, in particular, for the new communities of Tokyo near Tokyo Bay, with water and the bay.

Sea Forest Water Sports Centre has been approved by the canoeing and rowing international sports federations, the IOC, the Tokyo 2020 organising committee and the Tokyo Metropolitan Government. Detailed design plans have been approved by both sports. During this visit, the FISA President personally observed that construction work has commenced.

FISA therefore looks forward to fully engaging in continuing to find financial savings and operational efficiencies for Sea Forest while ensuring a world class field of play for Tokyo 2020. It equally looks forward to providing a sustainable and significant legacy for the people of Tokyo from this venue.

5、負の遺産になるのではとの懸念についての見解

ボートコースの運営については、戸田ボートコースをはじめ水道光熱費などはわずかで済んでいます。またブイの設置・撤去、水面のゴミ処理などに関しても従来のように、ボート協会で実施可能です。従って、大型ビルなどで懸念される維持管理費はかかりません。

護岸補修や栈橋の補修も10年に一度程度しか発生せず、その補修も取り立てて大きな負担とはなっていません。

以上